



レビュー

映画評論家や著名人による映画レビュー

「銀の森へ」沢木耕太郎

鉄コン筋クリート ～永遠の子供が主役の任侠映画～

弱きを助け、強きを挫（くじ）く。それが任侠（にんきょう）だとすれば、この「鉄コン筋クリート」はアニメーションによる一種の任侠映画だと言える。それも、少年を主人公にした任侠映画なのである。孤立無援の少年二人が、巨大な敵に徒手空拳で戦いを挑むのだ。

クロとシロと呼ばれる二人の幼い少年は、宝町という彼らの「シマ」で、自由に生きている。その自由さの中には、廃車をねぐらに二人だけで暮らすことも、大人のポケットから財布を失敬することも、隣町から遠征してきた少年たちを叩（たた）きのめすことも含まれている。

たぶんクロとシロは兄弟ではないのだろう。しかし、深い絆（きずな）で結ばれているらしい。兄貴分のクロは、無垢（むく）だがネジが緩んだような弟分のシロを守ることを自らの使命としている。シロはシロで、クロにはやはり何かのネジが欠けており、それを自分が持っていると感じている。

ところが、その宝町を食べ物にしようという大人たちが乗り込んでくる。新勢力は旧勢力と結びつき、クロとシロの「シマ」である宝町を破壊しはじめる。それがクロとシロを刺激する。とりわけ、シロと引き離されたクロは破滅的になり、敵との命がけの戦いに赴くことになる。

だが、これが任侠映画である以上、いくら子供が主役の物語だといっても、予定調和的な展開にはならない。幼いクロとシロも徹底的に痛めつけられる。シロは刀で胸を刺され、クロは矢で肩を射抜かれてしまう……。

この映画の心地よさの一つに、宝町という猥雑（わいざつ）な町を、クロとシロが伸び



©2006 松本大洋/小学館、アニプレックス、アスミック・エース、Beyond C、電通、TOKYO MX

やかに飛翔（ひしょう）するシーンがある。アニメにおける飛翔ということになれば、すぐに宮崎駿が思い出される。しかし、宮崎作品の飛翔にファンタジックなスマートさともいうものがあるとすれば、このクロとシロの飛翔には人間的な泥臭さが感じられる。それは、野良猫が屋根から屋根に飛び移るような、あるいはムササビが木から木へと飛び移るような動物的な飛翔だからかもしれない。

驚いたことに、これを監督したのはアメリカ人のマイケル・アリアスだという。とてもアニメ化は困難と思われる松本大洋の原作を、よくぞここまで仕上げることができた。私にとってそれは、「硫黄島からの手紙」がクリント・イーストウッドの手によって作り上げられたということ以上に衝撃的なことだった。

だが、そのアリアスに、ただ一点微妙な計算違いがあったように思われる。それはシロの声を蒼井優に演じさせたという点である。確かに蒼井優が演じることでシロの「無垢」性はうまく表すことができた。しかし、蒼井優の声の中に含まれている「女性」性がどうしてもシロに滲（にじ）み出てしまう。その結果、クロとシロの関係が兄と妹、あるいは男と女の関係にずれ込みかかる瞬間が生じてしまうのだ。これが少年たちによる任侠映画であるためには、たとえいかにシロが「無垢」な存在であっても、やはり男でなくてはならないはずなのに。

もし、これがかつての東映の任侠映画なら、クロとシロの二人、少なくともクロは死ぬことになる。しかし、そうはならないのは、子供が主役の物語だからではなく、彼らが生と死の彼岸にいる永遠の子供であるからだ。そして、それこそ、任侠映画の形を踏み抜いて、光と影をめぐるもう一つの物語が姿を現す理由でもある。そう、彼らはいつまでも大人にならない、あるいはなれない、宝町のピーターパンだったのだ。

2007年1月15日朝日新聞夕刊紙面

[画面トップへ ▲](#)

[ヘルプ](#) [サイトポリシー](#) [お問い合わせ](#) [サイトマップ](#) [個人情報保護方針](#) [広告出稿](#)
[会社概要](#) [このサイトについて](#)

※当サイトの推奨ブラウザは、Windows Internet Explorer6.0以上、Firefox1.5以上、Macintosh Safari 1.3以上、Firefox1.5以上となります。

Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

どらくに掲載の記事・写真の無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。